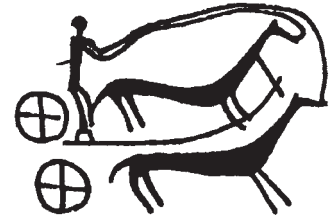


ニュースレター

Hokkaido University
Institute for the Advancement of Higher Education

北海道大学 高等教育推進機構
Newsletter No. 92



教育総長賞受賞者の授業から (3 ページ)
獣医学部で英語による授業のための FD を実施 (11 ページ)
音声番組「かがく探検隊コーステップ」を公開 (18 ページ)
(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

入学者選抜研究部門長としての一年

入学者選抜研究部門長 工学研究院 教授 佐々木 一彰

はじめに

昨年4月、前任の喜多村昇先生から研究部門長を引き継いで、早くも1年半が経過しました。それまで入学者選抜に関して、試験監督はもちろん、試験場本部員、出題や採点を担当する部会の委員等を経験してきました。これらの業務はすべて入学試験に直接関与するものですが、入学者選抜研究部門は、その性格が若干異なります。お引き受けして初めの1年間、手探りで仕事をしてきましたが、今回、機会をいただきましたので、入学者選抜研究部門がどのような仕事をしているのかをご紹介します、研究部門長としての1年間を振り返ってみたいと思います。

当研究部門では山岸みどり特任教授、鈴木誠教授、池田文人准教授の3名の教員がメインとなり仕事をしています。前身である高等教育機能開発総合センター・入学者選抜(企画)研究部として発足した当初はAO入試を導入するにあたっての諸問題を

検討することが主な業務だったようですが、AO入試が軌道に乗ってからは、以下のような多くの業務に関与しています。

AO入試

九州大学や東北大学に一年遅れて平成13年度入試から北海道大学にAO(アドミッションオフィス)入試が導入されました。第一次選考は提出書類、第二次選考は主に面接と課題論文による選抜方法で現在12年目を迎えています。

導入当初は、経済学部、歯学部、薬学部、水産学部、理学部(化学科と地球科学科)の5学部6学科で実施されました。その後、教育学部、農学部(農業工学科と農業経済学科)、工学部(応用理工系)、

理学部(数学科, 物理学科, 生物学科)が加わり, 平成 22 年度は 8 学部 13 学科に及びました。さらに, 平成 23 年度からは医学部医学科も加わりましたが, この年度に導入された総合入試と前後する形で, 経済学部, 教育学部, 薬学部, 農学部, 理学部(数学科, 生物科学科は 25 年度から)が AO 入試から撤退しました。当研究部門は AO 入試の当初の推進に間接的に寄与しており, 「AO 入試面接マニュアル」の検討, 「AO 入試課題論文」の問題チェックなどを行ってきました。

AO 入試を導入するメリットは各学部のアドミッションポリシーに合った学生を選抜できる点にあります。そのために, 各学部とも協力して AO 入試入学者の追跡調査等を行い, さまざまな形で報告してきました。また, 平成 21 ~ 22 年度の活動では, AO 入試 9 年間の総括としてまとめています(竹山, 山岸, 池田, 鈴木, 柴田, 宮本, 喜多村, 北海道大学の AO 入試 - 10 年間の推移と課題 -, 大学入試研究ジャーナル, 21)。

入試広報

部門の業務の一つに北大入試広報があります。新年度が始まると, 入試課と協力して, その年度の高等学校訪問計画を策定, 全国各地の主要高校を訪問し, 入試制度の説明を行い, 北海道大学を PR しています。特に, 総合入試導入前年(2010 年度)は, 大きく変更される入試制度を周知させるため, 多くの高校を訪問しました。昨年度訪問した高校数は, 北は北海道から南は九州まで, 約 120 校に達しています。また, 年 2 回道内各地で開催される北大

セミナー(写真 1), 北大オープンキャンパス, 秋に東京・名古屋・大阪で開催される北大進学相談会, 主要大学説明会や受験産業主催の説明会等における入試に関する相談にも対応しています。

今年度, 総合入試で入学した学生の初めての学科・コース移行が行われましたが, 昨年度からアドミッションセンター業務の一環として行われている新入生や移行した 2 年生へのアンケート調査に参画し, 総合入試や移行について学生がどのように考えているか評価を行いました。アンケートは数年間継続されるため, 今後の入学者選抜のあり方について検討する参考にしたいと考えています。

新学習指導要領対応入試

平成 21 年度に中等・高等教育に関する新学習指導要領が告示され, 今年度から高校数学・理科の学習指導要領が大きく変更されました。また, 来年度からは全教科の指導要領が変更になります。これに伴い, 平成 27 年度の大学入試では数学・理科に関する入学試験要領を変更する必要があり, アドミッションセンター企画運営会議のもとに設置された WG に参画し, 検討を行いました。また, 引き続き, 平成 28 年度の全教科・科目の入学試験要領についても同 WG で検討を行っています。

高大連携・高大接続

昨年度から, 新学習指導要領や高等学校と大学教育の連携・接続について検討するため, 「高等学校と大学の連携に関する研究会」を立ち上げ, 高校教諭との意見交換を行っています。また, 今年度は高



写真 1 北大セミナーでの保護者への説明会



写真 2 フィンランドの教科書(数学)

大連携に関するフォーラムを開催するべく検討を行っています。

高大連携・接続教育の一環として、授業聴講型公開講座を生涯学習計画研究部門と共同で実施しています。この制度は、毎年2学期に高校生に対して北大の正規学生とともに北海道大学の全学教育科目の講義の一部を受講する機会を提供し、討論やレポートを通して大学での教育を経験しながら、学問の面白さを発見したり、興味や関心を深める発展的学習を目指しています。平成16年度～20年度は試行でしたが、平成21年度からは正式の制度となり、平均で毎年30余名の高校生が受講しています。

外国の入学試験制度調査研究

AO入試のような新たな入学者選抜制度を検討するため、外国の入学試験制度について実地調査を行っています。この数年間、特に、特別選抜先進国であるフィンランドにおいて、大学入学資格試験や大学入試で求められるヒューマンスキルなど、参考

となる制度について調査し、今後の北海道大学の入学者選抜を考えるため、いろいろな観点から検討しています(写真2)。

おわりに

上に挙げたものは入学者選抜研究部門の業務の一端であり、限られた教員で多岐にわたる業務に対応していますが、すべての業務を研究部門の教員だけで行うのは不可能です。例えば研究部門を中心に企画し、アドミッションセンターが開催する北大進学相談会など、全学部の教職員にご助力をいただかなければならない企画も多くあります。北海道大学に(学力だけではなく、人間として)優秀な学生を迎えるため、研究部門の教員は日本全国の高校を駆け回っています。これからも皆様方に相談会やセミナーへのご参加をお願いすることがあろうかと思いますが、諸般の事情をご賢察いただき、積極的にお引き受けいただければ大変ありがたく思います。



教育総長賞受賞者の授業から

良質な授業プログラムの構築を目指して：体育学の授業改善

体育学担当 教育学研究院 准教授 大沼 義彦

この度、教育総長賞の表彰をうけました。望外の受賞で強く感じたことは、個人というより歴代及び現体育学担当教員の授業に多くを学ぶことができたことへの感謝でした。ここでは私なりの授業改善のポイントについて大まかにご紹介させていただきたいと思います。それは、私が着任当初、ある年長の教員から受けたアドバイス(薫陶?)であり、以来、授業を考える際の準拠点になっているものです。

その第一は、「良質な授業プログラムを学生に提供し続けること」です。これは大学教育の基本的前提といえますが、そう簡単にできるものではありません。「良質な」授業とは何かを常に考え、そして「提供し続け」なければならないからです。体育学にお

ける「良質な」授業とは、ひとまず学生が「わかって、できるようになる」授業と考えています。体育学では実技が求められますが、実技は本を読んでもうまくなりません。一定の練習時間(技術を身体化する時間)が必要です。そして技術的なポイントやコツを理解し、言語化し、相互に伝え合うことも必要です。これが体育学の授業の具体的中身となっていきます。

第二は、「一つの授業の課題を一つに絞ること」です。授業内容はできてもその編成や構成をどうするかが課題となってきます。私の場合は、しばしば「盛りだくさんの授業」に陥りがちでした。これは教員側からすると「たくさん進んでよかった！」となるのですが、焦点が拡散してしまいます。学生側からすると「何をやったか、何を言いたいかわからない」となります。何より、一つの時間の中で何をどこまで獲得できたらよいか、学生自身の評価が困難になります。

「学生が到達度を客観的に把握できる課題の提示」、これが第三になります。例えば、「バックハンドストロークでこのエリアの中に80%以上の確率で返球できるようにする」などです。そして「うまくできない」理由の中に面白いスポーツ科学や技術

的ヒントが隠されていますので、これらを見逃さずに主題化し伝えていくことです（ここは研究成果を生かせるところであり、大学体育の特徴でもあります）。また授業では技術的な改善の方向性を個別具体的に示すこと、練習時間や運動量の確保も心がけています。

基本的にはこの三つの点を軸に15週の授業を計画、実施、評価していくこととなりますが、良質な授業を提供し続けるための条件も必要です。この間、体育学の授業環境（体育・スポーツ施設、TA等）は飛躍的に改善されました。それは授業評価や学生の運動生活の質にも反映されていると思います。今後ともこれらを最大限に活かした授業展開を追求していきたいと考えています。

数学の授業改善

微分積分学・線形代数学担当 理学研究院 准教授 澁川 陽一

私が本学の全学教育で微分積分学・線形代数学を担当して、およそ5年半が経ちました。まだまだ満足のいく授業ができない状態でこのような文章を書くのは大変気が引けるのですが、今回、私が授業で取り入れている教育上の手法や授業に際し留意していることなどを紹介致します。

私が授業で取り入れている教育上の手法は、小テストです。授業開始時に10分程度で行い、前回の授業内容から出題しています。教科書を見ながら解答することは許可していませんが、ノートを見ることは許可しています。「いい復習になった」、「前回の授業を思い出した上で授業に臨めた」、「予・復習する習慣を身につけることができた」などというコメントを、学生による授業アンケートでもらっています。

以下、授業に関し私が留意している点を挙げます。

●偏らず、中庸を心がけています。授業にあたって私が学生に望むことはもちろんありますが、学生側にも授業やその担当教員である私に望むことがあると思います。これらが合致しているならばよいのですが、なかなかそれは望めません。その

際、どちらかをあきらめてしまうのではなく、バランスを取りながら、どちらもある程度納得するような授業をするよう心がけています。

- 半期の授業開始前に全15回分の授業内容を決め、板書内容なども含めてノートを作成しています。また、中間・期末試験についても、シラバスの到達目標に合致するよう、あらかじめ同時期に作成しています。
- 中間・期末試験だけで成績評価はせず、前述の小テスト、および授業外学修を促すために課しているレポートも成績評価対象に加え、試験、授業、授業外学修を満遍なく評価するようにしています。

今回の教育総長賞受賞を励みに、今後も教育・研究両面で、私にできることを行っていきたいと考えています。

第 62 回共通教育研究会が開催

道内でも暑い日の続いた今夏、8月31日、9月1日の両日、酪農学園大学にて、第62回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会が開催されました。今回の全体テーマは「誰のための学士課程教育か？—学生・教職員・大学それぞれの自己実現の観点から—」で、基調講演、分科会、事例報告がありました。

第1日目の午前中には、京都大学高等教育研究開発推進センター溝上慎一准教授より、「高いキャリア意識が学習を促し、就業パフォーマンスを規定する」と題して基調講演がありました。豊富なデータ分析にもとづきながら、学生のもつ将来への見通しとそのため理解・実行が、学習・就業に影響を与えることについてお話がありました。

同日午後には、3つの分科会が行われました。

第1分科会は「学生の自己実現を支援する取り組み」がテーマです。おもに学習支援の取り組みの紹介がありました。そのなかで、本学特定専門職員の日吉は「北海道大学における初年次学生への修学支援と学習支援」という題でアカデミック・サポートセンターにおける学生支援の状況を報告しました(写真1)。学部・学科等移行にまつわる相談対応や学

習サポートの報告です。

第2分科会は「大学の自己実現を目指す取り組み」をテーマとし、大学間連携や教養教育の全学的取り組みなどについて話題提供がありました。こちらでは、高等教育推進機構細川敏幸教授より「教学 IR システムの活用」と題して報告がありました。

第3分科会は「教職員の自主的な取り組みと、それを促す取り組み」がテーマで、新しい授業方法や地域連携の実践などについて話題提供がありました。こちらでは、高等教育推進機構山田邦雅准教授より「リアルタイム添削授業の実現に向けて」と題して発表がありました。

第2日目には、事例報告として、法政大学藤田哲也教授による「初年次教育における教育目標をめぐる問題～法政大学『基礎ゼミ』の実践例を通して～」と題する講演およびワークショップがありました。

この研究会は、以前は一般教育研究会と呼ばれ、これまで長年にわたって開かれています。今回出席して、他大学での新しい取り組みや、教養教育・学士課程教育の方向性について勉強できる貴重な機会であると感じました。(日吉 大輔)



写真1 分科会の様子

学務委員会報告

学務委員会報告

平成 24 年 8 月 1 日（水）に平成 24 年第 2 回学務委員会、9 月 10 日（月）に第 3 回学務委員会が開催され、以下の議題について話し合いました。

平成 24 年度第 2 回学務委員会

議題

1. 平成 25 年度全学教育科目の開講計画
2. 北海道大学博士課程教育リーディングプログラム奨励金要項
3. 北海道大学博士課程教育リーディングプログラムにおける独創的な教育研究活動に必要な経費の取り扱いに関する要項

報告事項

1. ファースト・ステップ・プログラムの一般教育演習における開講
2. 平成 24 年度第 2 学期の履修調整
3. 平成 24 年度全学教育専門委員会の検討事項
4. 平成 24 年度第 1 学期の履修者数
5. 平成 23 年度第 2 学期の成績評価結果等
6. 平成 23 年度第 2 学期の GPA
7. 平成 23 年度初習外国語 II の CALL 授業に関する報告
8. 全学教育科目のナンバリング

平成 25 年度全学教育科目の開講計画

平成 25 年度の全学教育科目の開講計画が了承され、現在この案に基づき開講計画を立案中です。

博士課程教育リーディングプログラム

リーディングプログラムに採択された学位プログラムに関する奨学金や教育研究活動経費の規則案

を了承しました。

ファースト・ステップ・プログラムの一般教育演習としての開講

この科目は、交換留学等の海外派遣プログラムに学生の主体的参加を促す目的があります。その意味で、平成 25 年度から一般教育演習（フレッシュマンセミナー）としての開講が了承されました。

平成 24 年度第 2 学期の履修調整

2 学期の履修に関して、いくつかの演習科目で優先順位を付して履修調整をする必要が生じました。これは、履修希望者の増加に伴い、抽選に落選し続けることで卒業要件単位を満たすことができない学生が発生するのを防ぐためです。一般教育演習（フレッシュマンセミナー）、英語演習、初習外国語演習に関して、今回は承された手順にしたがい、抽選を行うこととしました。

平成 24 年度第 1 学期履修者数

平成 24 年度 1 学期の履修者数が報告されました。昨年度は新しく総合教育部の発足に伴い、履修者数の大幅な増加がありましたが、今年度はそれが多少緩和された印象です。昨年度に比べ、全学教育科目 1 学期の履修者数は、2 年次学生を中心に約 3,500 名減少しました。特に総合科目は約 1,100 名、主題別科目は約 2,400 名減りました。逆に、外国語演習が引き続き 360 名、また基礎科目の中では地球惑星科学が 201 名増えたのが目につきました。

平成 23 年度第 2 学期の成績評価結果

平成 23 年度 2 学期の成績評価について、「偏りがある」とされた科目への照会結果等の報告がありました。GPA の許容範囲を平成 24 年度 1 学期から、1.95 ～ 2.95 に変更することが報告されました。

平成 23 年度初習外国語 II の CALL 授業

平成 20 年度より、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語で CALL 授業を導入しています。履修者数は、ドイツ語 1,052 名、フランス語 272 名、ロシア語 68 名、中国語 789 名です。最新のメディア機器を利用して、対面授業による教育効果とほぼ同等の効果を維持しています。

全学教育科目のナンバリング

教育改革室による「北海道大学ナンバリング(案)」に基づき、全学教育科目への導入について説明がありました。これは、本学の第 2 期中期計画における「学部の人材養成目的に沿った順次性のある体系的な教育プログラムを編成する」との方針に沿ったものです。

平成 24 年度第 3 回学務委員会

議題

1. 平成 25 年度全学教育科目における 6 講時授業の実施
2. 全学教育科目におけるナンバリングの実施
3. 「2 年次進級時における学部・学科等への移行点算出基準単位表」の変更
4. 北海道大学鈴木章科学奨励賞—自然科学実験—(平成 24 年度第 1 学期) の被表彰者の選考

報告事項

1. 平成 24 年度第 1 学期 1 年次学生の異動

平成 25 年度全学教育科目の 6 講時授業

平成 24 年度 1 学期に全学教育科目において実施された 6 講時授業について、アンケート調査を行った結果が報告され、平成 25 年度も実施することが了承されました。

全学教育科目のナンバリングの実施

全学教育科目のナンバリング実施案についての意見徴取の結果を踏まえ、それに基づく修正案が了承され、平成 25 年度開講科目から実施されることになりました。

「移行点算出基準単位表」の変更

総合入試入学者の学部・学科等移行の基準となる成績(移行点)の算出方法の変更が了承されました。これは、昨年度、移行点を向上させるために学生の履修傾向が変化したことに伴う措置です。具体的には、1)「外国語科目及び外国語演習」の移行点参入単位数の変更、2)理系における「人文・社会科学の基礎」の算入単位数の制限、3)再履修単位の算入規則の見直し、からなります。

鈴木章科学奨励賞—自然科学実験—の被表彰者

今年度 1 学期の自然科学実験履修者の成績をもとに、鈴木章科学奨励賞の被表彰者 2 名を決定しました。

(山口 淳二 副機構長・理学研究院教授)

平成 24 年度 全学教育科目企画責任者名簿

授 業 科 目	所 属	職 名	氏 名
「思索と言語」	文学部	教授	佐藤錬太郎
〃	外国語教育センター	准教授	奥 聡
「歴史の視座」	文学部	教授	三木 聡
〃	法学部	准教授	眞壁 仁
〃	経済学部	准教授	内藤 隆夫
「芸術と文学」	文学部	准教授	応 雄
〃	〃	准教授	安達真由美
〃	外国語教育センター	教授	野澤 俊敬
「社会の認識」	文学部	教授	金子 勇
〃	法学部	准教授	眞壁 仁
〃	経済学部	教授	小山 光一
「科学・技術の世界」	文学部	教授	菱谷 晋介
〃	理学部	教授	松王 政浩
〃	工学部	教授	菊地 優
「健康と社会」	教育学部	教授	大塚 吉則
「体育学」	〃	教授	西尾 達雄
「統計学」	経済学部	准教授	鈴川 晶夫
「情報学」	工学部	教授	北 裕幸
「英語」「英語演習」	外国語教育センター	教授	河合 靖
「ドイツ語」「ドイツ語演習」	〃	教授	江口 豊
「フランス語」「フランス語演習」	〃	准教授	鍋島 孝子
「ロシア語」「ロシア語演習」	〃	教授	宇佐見森吉
「スペイン語」「スペイン語演習」	〃	准教授	岡田 敦美
「中国語」「中国語演習」	〃	准教授	西 茹
「韓国語」「韓国語演習」	〃	准教授	玄 武岩
「外国語演習」	法学部	准教授	齋藤 哲志
〃	文学部	教授	中戸川孝治
〃	教育学部	准教授	大竹 政美
〃	経済学部	教授	安部由起子
「外国語特別演習」	外国語教育センター	准教授	飯田 真紀
「人文・社会科学の基礎」	文学部	准教授	小田 博志
〃	教育学部	准教授	浅川 和幸
〃	法学部	准教授	緑 大輔
〃	経済学部	准教授	岡田美弥子
「数学」	理学部	教授	高岡 秀夫
「物理学」	〃	准教授	野崎 龍介
「化学」	〃	教授	村越 敬
「生物学」	〃	准教授	三浦 徹
「地球惑星科学」	〃	准教授	石渡 正樹
「心理学実験」	文学部	教授	田山 忠行
「自然科学実験 (物理学系)」	理学部	講師	武貞 正樹
「自然科学実験 (化学系)」	〃	准教授	廣川 淳
「自然科学実験 (生物学系)」	〃	准教授	和多 和宏
「自然科学実験 (地球惑星科学系)」	〃	准教授	橋元 明彦
「基礎自然科学実験」	〃	准教授	橋元 明彦
「日本語・日本事情」	国際本部	准教授	中村 重穂

学部・学科等移行ガイダンス

学部・学科等紹介

9月25日と26日に学部・学科等移行ガイダンス、学部・学科等紹介が行われました。

今年で2年目となりますが、総合入試により入学した1年次学生に関しては、本年度3月に学部・学科等への移行が行われます。既に4月の入学時にも、この移行に関するガイダンスを行いました。今回2学期の開始前に再度ガイダンスを行い、あわせて移行先となる各学部・学科等の説明会を開催しました。移行先の学部・学科等の詳細について、所属教員によって丁寧な紹介をお願いしようとの趣旨で企画したものです。

まず、9月25日午後に、文系総合入試学生は1クラス、理系総合入試学生は4クラスに分けて、1時間30分の予定でガイダンスを行い、総合入試で入学した学生のほとんどが参加しました。今回のガイダンスでは、基本的には4月に行われた移行に関する説明をさらに詳細に説明し、さらに、このガイダンスの直後に実施される予備志望調査の操作方法について、及び移行先決定のシミュレーションを示しながら詳しい説明等も行いました(写真1)。

説明は、総合教育移行専門委員会メンバーから眞壁先生(法学部)、村田先生(医学部保健学科)、周東先生(薬学部)、飯田先生(歯学部)、今内先生(獣医学部)、五嶋先生(水産学部)の6名にお願いし、スライドを使いながら行いました。

このようなガイダンスは2学期終了時の移行の

直前にも再度実施されます。何度も何度もガイダンスを行うことで、円滑な移行の実現を目指しています。また、当日は移行に関する詳細なパンフレット「学部・学科等移行ガイドブック(平成25年3月移行手続き用)」を配布しました。これをよく読み返して、移行のしくみについて十分に理解してほしいと願っています。

翌日の26日には、朝9時から17時15分まで「学部・学科等紹介」が行われました。全ての学部・学科等の移行単位は、それぞれ高等教育推進機構E棟やS棟に割り当てられた教室を自由にアレンジしたブースで、学生に対してさまざまな趣向を凝らした学部・学科等の紹介を行いました。

昨年度同様、30分の紹介時間の後15分の休憩・移動時間を設け、これを10回繰り返しました。従って、学生は、最大10のブースをまわることができます。学生には事前に、ELMSに掲載するとともに、前日の移行ガイダンス時及び教務課窓口において、各移行単位がブースを設けている教室番号と紹介時間帯が記載されている資料を配布しました。

当日学生は、この資料を片手に、自分の興味のある学部・学科等の展示ブースを次々に訪問していました。アンケート等の調査結果から、参加した学生は延べ4,000名を超えたと推定されます。これは昨年度と較べても、1割程度増えています。9時の開始前から本当に多くの学生が廊下で待機し、熱



写真1 ガイダンスの様子



写真2 ブースをまわる学生

心に多くのブースを訪問していました。訪れる学生の数が多くて、廊下まであふれているようなところもあれば、少数の学生とじっくり話しこみながら説明しているところもありました。教員だけでなく、大学院生や学部の上級生が案内や説明を行っているところもありました。また、かなり設営に力を入れてブースの設定をしているところもありました。その意味でも、担当された教員の皆様の熱意がひしひしと伝わってきました(写真2)。

終了後に各学部・学科等にアンケートを実施し、おおよその訪問学生数や今後の改善に向けた自由意見を記入してもらいました。今年度文系学部では、合同で学部・学科紹介を実施しましたが、おおむね好評のようでした。学部・学科を訪問した学生の概数をみれば、ある意味「人気度」が推測できます。ただ、その数が多ければ成功と安心してよい訳でな

いと思います。要は、今回の学部・学科等紹介で、学生の「希望」、「思い」といったものをしっかり受け止め、その期待に答えられたのか、学生が疑問を持ち帰ることなくスッキリした気持で終わったのか、などが本当に重要なことだと思います。

学生へのアンケートも実施しました。まだ十分な数の回収には至りませんでした。今後の参考にしたいと考えています。とはいえ、今回の学部・学科等紹介で垣間見た学生の熱気は、移行制度の将来に大いに希望を抱かせるものでした。なお、各学部・学科等の紹介と並行してアカデミック・サポートセンター主催の相談会も開かれ、こちらも盛況でした。

今後も、改善を加えながら、このような試みを続けていく予定です。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(山口 淳二 総合教育部長・理学研究院教授)

第2回クラス担任連絡会

9月3日に情報教育館において、平成24年度第2回クラス担任等連絡会が開催されました。昨年と同様、2時間程度で終了予定のプログラムとしました。クラス担任・副担任は104名となりますが、そのうち40名が参加しました。

この連絡会の主催は、総合教育部長の山口ですが、当日出張だったため、和田博美全学教育部長に代理として司会をお願いしました。

まず山口佳三高等教育推進機構長よりの挨拶の後、和田全学教育部長から「学生の学修状況について」説明いただきました。横田篤学生相談室長より「学生相談体制について」説明があり、また川端潤アカデミック・サポートセンター長より「アカデミック・サポートセンター(略称アカサポ)について」活動状況等の説明がありました。

武蔵保健センター長の「学生の健康管理について」の報告、和田全学教育部長から昨年度のクラス担任及び副担任に対するアンケート調査結果につい

て説明がありました。引き続き、保健センターの精神科医である朝倉聡准教授の「学生のメンタルヘルスについて」の講演がありました。感染症や酒とタバコに関する注意、精神衛生相談の受診者数や自殺者数の変遷等についての話で、特に自殺を防ぐための諸注意、メンタルヘルス・ファースト・エイド(メンタルヘルスの問題を有する人に対して、専門家の支援が提供される前に提供すべき支援)についての説明がありました。

次にクラス担任の事例紹介として、和田全学教育部長の司会のもと、金井理工学研究院教授ならびに柳村俊介農学研究院教授からお話を披露いただきました。

2時間にわたる連絡会は、活発な質疑もあり有意義な会となりました。クラス担任の皆様の日頃のご努力、ご協力に感謝申し上げます。

(山口 淳二 総合教育部長・理学研究院教授)

高等教育 HIGHER EDUCATION

獣医学研究科で英語による授業のためのFDを実施

獣医学研究科FD

獣医学研究科では、大学院授業の全面英語化の方針を受けて、英語で行う授業のためのFDを行っています。今年度は、香港理工大学の Educational Development Centre(EDC) から John Sager 氏を迎えて9月24～25日に「高麗大学と香港理工大学での英語授業の取り組み」が行われました。Sager氏はStaff and Student Development Sectionのコーディネーターで、新任教員・非常勤教員・TAの研修の責任者を務めています。

初日の講演会は、アクティブラーニング形式で参加者と対話をしながら行われました(写真1)。Sager氏は、授業の英語化率が韓国で最も高いことで知られる高麗大学で英語で授業を行う教員向けFDを担当していた経歴を持ち、香港と韓国を対比させながら双方の教員のための英語サポートの内容を説明しました。

高麗大学では、新任教員はEnglish-Mediated Course(EMC)修了書を取得することが要求されます。このコースは、

- ・コーチングセッション
- ・マイクロティーチングセッション
- ・ワークショップ

新任オリエンテーション
小グループ学習
ランチョンミーティング

アカデミック英語

などのアクティブラーニングを中心とした教育に関する講義などで構成されています。

一方、香港理工大学では、Certificate in Introduction to University Teaching(IUT)が新任教員に課されます。このプログラムは、

- ・授業初日のためのアクティブラーニング
- ・香港理工大学の学生とは？
- ・アクティブラーニングの計画と準備
- ・学生の引き付け方
- ・評価の要点
- ・クラスのマネジメント
- ・教育の実践
- ・成功例・新たな試み

などで構成されています。

このように、大学の授業は英語化と並列してアクティブラーニング形式で授業を構成することが求められていることが解ります。

2日目は、「学生に考えさせる授業」をテーマに若手教員5名が参加し、アクティブラーニング形式でワークショップが行われました(写真2)。机の配置替えや獣医学研究科の授業英語の導入状況を尋ねるなどのウォーミングアップの後、Sager氏から参加者に対し、1)英語で行っている授業で今一番困っていること、2)英語で行う授業を改善するためにぜひ学びたいことをひとつ挙げる、の二つの質



写真1 初日のSager氏の講演

写真2 2日目のアクティブラーニングワークショップ

問が出され、各自5分間で紙に回答するように求められました。その後、回答内容を報告する中で、よく質問や発言をするが基礎知識の不足などの問題の多い留学生と、基礎知識はあるがほとんど発言しない日本人学生が混在している状況に苦慮していることが共通の課題であることがわかりました。Sager氏は、留学生の理解度をどのように把握しているのか、日本人学生に発言させるためにどのような工夫をしているのかなどの質問を巧みに重ね、”Did you understand?”と尋ねることや、間をもたせるための思いつきの質問などはあまり有効ではないことを参加者に気づかせました。

Sager氏は、学習者に考えさせ、学習に関与させ続ける授業環境をつくるためには、入念な事前準備が必要であることを何度も強調し、受講生に基礎知識を授業前に確認させ授業の中でも活用できる質問紙の作り方、先入観を認識させ異なる見方を考える手がかりとして“provocative statements”を使うなどの手法を紹介しました。参加者は、学生の立場になって課題や質問に答える体験を通じて、アクティブラーニングの手法と有効性を実感することができ、今後の授業に向けて多くのヒントが得られたとの好意的な評価が寄せられました。

高等教育フォーラム

9月27日にはSager氏を高等教育推進機構に招き、高等教育開発研究部門が主催の高等教育フォーラム『「アクティブ・クラスルーム」を促進するためのFD』が行われました(写真3)。

まず、EDCが大学の戦略にあわせて行っている活動の概略が紹介されました。香港理工大学のコア

カリキュラムは

- ・言語とコミュニケーション
- ・フレッシュマンセミナー
- ・リーダーシップ&自己開発
- ・サービ斯拉ーニング
- ・ヘルシーライフスタイル
- ・その他の選択科目

で構成されていますが、語学は英語と中国語の両方の習得を目指すという特徴があるそうです。

また、4年制への移行にともない、米国型の教養教育が導入され、その新しいカリキュラムは、社会のニーズに合わせたものになっていること、そして香港特有なものとしては企業家精神を育てることを目的にしていることです。また、アウトカム評価は、グローバル化に向けられています。

香港理工大学では、上記のような研修によりアクティブ・クラスルームが促進されていますが、ほかにもe-ラーニングシステムを有効活用していることにその秘密があるようです。

香港理工大学ではラーニングマネジメントシステムとしてブラックボードを利用していますが、通常の教員はファイル置き場としての利用がメインとなってしまうのですが、ここでは、掲示板を通して多くの教員が授業法、アクティブラーニング、宿題などについての情報共有を行っています。またブラックボードの中で教員のブログも解説されており、どのようなことが起こったか、どのような問題があったかなど、新任教員に有用な情報が公開されています。このように、助け合いの精神がFDに繋がっているというのは、われわれも見習わなければならないことです。(山田 邦雅, 山岸 みどり)



写真3 高等教育フォーラム：Sager氏の講演

高等教育フォーラム「ECTS (ヨーロッパ単位互換システム) で留学を促進：ボローニャ・プロセスのキーツール」

9月21日共用多目的教室(2)で、ベルギー・ゲント大学のHendrik FERDINANDO 特任教授(客員教授)による講演が行われました(写真1)。

ECTSとはEuropean Credit Transfer (and Accumulation) Systemの略です。ヨーロッパにおける大学間学生交流事業ERASMUS (European Community Action Scheme for The Mobility of University Student)により、大学間で学生の流動性を高めるために作られた単位互換制度であり、科目の学修成果と学修量を明確化することで、高等教育の質保証の役割も担っています。

ECTSの単位は、科目で学修成果として掲げられる全項目を達成するために必要な学修量を基準として算出されます。

学修量は、学生がその科目を修了するために一般的に必要とされる時間であり、それは授業時間だけでなく授業外学修や試験の時間も含まれます。1 ECTSは25～30時間です。

学修成果は、その科目の修了までに学生が習得しなければならない、知識、理解、能力です。これは、職業訓練的な内容も含まれており、高等教育の質保証につながっています。

全てのECTSの授業は、科目の概要、学修成果、学修量などが明記されたWebで1ページのコースカタログとして公開されなければなりません。

コースカタログは、ECTSのkey documentsの1つで、他にはStudent Application Form, Learning Agreement, Transcript of Records, Diploma Supplementがあります。

しかし、ECTSを採用することは、教員がECTSの詳細を理解し、成績の付け方をはじめとする考え方を変えなければならないということを意味します。これは実際にかかなりの負担となるようです。

また、ECTSはヨーロッパの高等教育の統一規格に成り得るものですが、難しい課題も残されています。現在、高等教育ではグローバル化が一つの大きな目標であり、世界レベルでの流動性が望まれています。ECTSは、アメリカのAAPTやAPS, FoE, ヨーロッパのDPG, IoPなどの他の単位制度との互換性はありません。

また、ECTSは学士と修士に関する単位制度ですが、修士課程は英語で行われているところが多いものの、学士課程はローカル言語で行われているところがほとんどで、流動性を高める上で大きな障害となります。

このように、ECTSは、単位に必要な学修成果・学修量の厳格化を伴います。グローバル化とともに質保証も同時に実現されるという、まさに現在高等教育が目指している方向への取り組みです。

(山田 邦雅)

2012 年度 IDE 大学セミナー開催される

IDE 大学協会北海道支部の大学セミナーが「学習評価の将来像を求めて」をテーマとして、8月24日～25日にホテル札幌ガーデンパレスで開催されました。

今後3年ほどで、教育の質保証の一環として各大学はアウトカム評価を実施する必要があります。そのためには、アドミッションポリシー(AP)、カリキュラムポリシー(CP)、ディプロマポリシー(DP)の設定やカリキュラムマップ、成績以外の学生調査が要求されます。しかし、北大を含め道内の大学ではこれらの改革は、まだ進んでいません。

今年度のIDE大学セミナーでは、カリキュラムマップと学生調査の導入を積極的に展開している国内の活動の事例とともに、道内の動向について、以下のようなプログラムで紹介しました。(表1)。

特別講演

最初の講演は同志社大学の山田先生でした。学士課程の改善サイクルを考えると、学生の学修成果の把握については、アセスメントテスト(学修成果の測定・把握のための調査)、学修行動調査、ルーブリック(学修評価の基準)などを利用し、諸外国の例も参考にしつつ、学生の学修到達度を測る方法や学生の学修行動の調査方法を研究開発しなければなりません。そのアウトカム・アセスメントに関して、従来の制度で我々が持たないのは間接評価としての学生調査であり、今後導入する必要があります。

この議論を受けて、2009～2011年度に同志社大、北大、甲南大、大阪府大の4連携大学間でIRネットワークシステムの構築が試みられました。このシ

ステムでは直接評価(GPA)と間接評価の連結による評価が実施され、コンピュータシステムを導入して、参加大学の分析負担を軽減しました。今後は「IRコンソーシアム」が組織されるので、成果の学生教育への還元と全国規模の大学IRコミュニティ育成が期待されます。

次の特別講演は、国立大学の中でも早期に3つのポリシー(AP, CP, DP)を策定し教育制度改革に活用している、山口大学の小川氏でした(写真1)。DPとは、学士課程答申の中で、各大学の各学部・学科が「育成しようとする人材像」や「卒業までに学生に対して保障する基本的な資質」を具体的に記述したものです。一方、CPは、DPと各授業における到達目標との間で、DPの達成を保証するために体系性と整合性を明示するために作成されるものです。APは、DPとCPに基づく教育プログラムで学習するために、入学者に求める知識・能力に関する方針です。これらのポリシーを設定し、それに従って教育を行うことで教育の質保証がされます。

山口大学では、3つのポリシー策定後も教育改革を続け、4年間一貫の学士課程教育を考慮した新カリキュラムマップとともに、カリキュラム・ツリーも作成しました。「カリキュラム・ツリー」または、「カリキュラム・フローチャート」は、学士課程教育に配される各科目のDPに対する体系性、系統性、順序性を示すもので、カリキュラム構築の条件のsequenceの検証に有効です。

さらには、成績分布共有システムを活用した厳格な成績評価、出席確認システム、ポートフォリオを導入しました。このように、大学教育改革は目標

表1 2012年度IDE大学セミナープログラム

1日目	
特別講演「アウトカム評価とIRネットワーク」	同志社大学教授 山田 礼子
特別講演「グラデュエーションポリシーとカリキュラムマップ」	山口大学 大学教育センター教授 小川 勤
2日目	
シンポジウム(2日目)「北海道における学習評価の進展」	司会：北海道大学教授 細川 敏幸
IRネットワークによる相互評価	北海道大学准教授 山田 邦雅
アウトカムズ評価を意識した高専のモデルコアカリキュラム	函館工業高等専門学校教授 小林 淳哉
工科大の教育目標設定と評価	室蘭工業大学准教授 安居 光國
「学士力プロジェクト」における学習評価の進展と課題	北海道教育大学釧路校准教授 伊田 勝憲

の設定のみでは終わらず、それを実現するためのたくさんの制度改革や研修が必要です。

2. シンポジウム

2日目のシンポジウムでは、道内の3大学ならびに高専のシンポジストが各機関の取組について報告しました(写真2)。

北海道大学は、山田礼子氏から紹介されたネットワークに参加しており、そのデータの分析について山田邦雅氏が報告しました。すなわち、IRネットワークにより得られるデータは、大きく分けて2つの軸で評価することができます。1つは大学間の相互評価であり、客観的な評価が可能となります。2つ目は経年変化で、自大学の動向がわかります。IRネットワークでは、学生の教務データと学生アンケートが個人ごとに対応付けられた形で得られるため、学生の自己評価・生活・習慣等と成績・履修状況等の相関により、精神面と学習面が連携した改革も可能となります。

次に函館高専の小林氏が、高専のモデルコアカリキュラムについて解説されました。高専機構では平成23年度末、全国高専の必須の学習到達目標としての「モデルコアカリキュラム」を策定し公開しました。その目指すところは、全高専の学生のアウトカムズとしての最低限の質保証ですが、大学や企業においてもさらに成長を続けるための途上として位置づけ、その到達度を明記しています。つまり、大学や企業にとっては、高専教育との接続点が明確化されていることとなります。この際、到達度は6段階のルーブリックとして客観的・定量的評価が可能な形に整理しています。現在、モデルコアカリキュ

ラム準拠の教科書開発も進めており、モデルコアカリキュラムの策定はFDや授業評価、自学自習支援などに大きな改革をもたらしつつあります。

室蘭工大の安居氏はJABEE(日本技術者教育認定機構)のもとでの教育目標設定と評価について説明されました。室蘭工大は学部および大学院の教育におけるDP、CPを平成24年度までに順次設定しました。これには、JABEEの認定を昼間コースの全学科が平成20年度までに受けるにあたり、各教育プログラムの持つ学習・教育目標に対し科目と学習・教育到達目標の関連性が明示され、カリキュラムマップの構築が先行したことが背景にあります。現在はJABEE基準で工学技術者としての質保証をする一方で、大学の設定したCPを各学科で実質化すること、DPのアウトカム評価の測定方法が課題になっています。

最後に文系大学で目標の設定を終えている北海道教育大学の伊田氏が、その活動を解説されました。「往還型カリキュラムによる教員養成の改善」(平成20～23年度、教育GP)および「学士力プロジェクト」(平成21～23年度概算要求、特別教育研究経費)が実施され、カリキュラム開発チーム(約50名)対象の教育目標と教育評価をテーマとした研修会、各授業科目の目標設定に焦点を当てたシラバスワークショップ(全教員対象)の開催等、学習評価に関する取り組みが展開されてきました。さらにステップアップ・チェックリスト(学生の自己評価用)と各授業科目のシラバスとの関係、電子ポートフォリオの運用状況等についても報告されました。今後の課題は、これらの教育制度改革の有機的な連携です。(細川 敏幸)



写真1 小川教授による特別講演

写真2 パネルディスカッション

生涯学習 LIFELONG LEARNING

平成 24 年度北海道地区大学 SD 研修
「大学職員セミナー」を開催

今年度の大学職員セミナーは、10月23日(火)、24日(水)の2日間にわたって、北海道大学百年記念会館を会場にして開催されました。本セミナーは、平成18年度以来、北海道大学の公開講座として、道内の国公立大学の参加者を迎えて開催され、平成22年度からは北海道地区FD・SD推進協議会の発足に伴い、北海道地区大学SD研修として、北海道大学高等教育推進機構、大学院教育学研究院、総務部人事課・学務部総務課が主催して実施してきました。本セミナーは、今までの成果を踏まえて、①職場である大学を、日常業務の立場から離れた視点で捉え、②現場で起きているさまざまな問題の背景、改革の方向を考え、③他の参加者や講師と議論しながら、今後の課題を探っていくことを目的にした学習と交流の機会となっており、20～30代の若手職員を中心に、講演とグループに分かれて行うワークショップによる研修を行ってきました。

今年度の参加者は、42名(うち本学9名)、7国立大学、2公立大学、11私立大学・短大、1高専の大学事務職員で、他にファシリテーターとして教員等7名が参加しました。開講にあたり、村田直樹理事・事務長が挨拶しました。

「大学職員のキャリア形成と意識改革」をテーマに、1日目は、北星学園大学の桐山城太郎さん(学生支援課)と鈴木峰子さん(人事課)が「大学職員キャリアプランプロジェクト『若手職員研修会』の取り組み」、北海道教育大学釧路校の井上明香さん(学務グループ)の道内の2つの実践の報告、2日目には東京理科大学の北原和夫教授(日本学術会議・大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会委員長)に「大学改革の課題と職員に期待される役割」をテーマの講演をいただきました。これらを参考にしながら、2日間にわたり、受講者は6人ずつ7グループに分かれ、ワークショップで「大学職員のキャリア形成と意識改革」について討論し、大学職員を対象にする研修プログラムを各グループに提案してもらいました(写真1)。

各グループの報告、討論では、大学職員が学び、大学改革の主体となることの意義が確認され、それを受けて、姉崎洋一教育学研究院長、木村純高等教育推進機構生涯学習計画研究部門長が講評し、閉講式では山口佳三理事・副学長の挨拶の後、参加者全員に修了証書を授与しました。(木村 純)



写真1 グループでの討論

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

36名の高校生の全学教育科目の受講始まる

～北海道大学高大連携授業聴講型公開講座～

第2学期の開始と同時に、平成24年度の「北海道大学高大連携授業聴講型公開講座」による高校生の全学教育科目の受講が始まりました。札幌市内の5つの高等学校(札幌旭丘, 札幌北, 藤女子, 札幌南, 札幌開成)から計36名(2年生13名, 1年生23名)の生徒が18科目(一般教育演習2科目, 総合科目10科目, 主題別科目6科目)を受講しています(表1)。5回の試行を経て平成21年度から実施されているこの制度は、高校生が北大生と一緒に授業を受けることができ、大学生の日常生活や勉学の様子を直接知る貴重な機会を提供しています。中には高度な内容に戸惑う姿も見られますが、高校生は本学の授業を体験しながら、学問のおもしろさを発見しようと意欲的に受講しています。

授業開始に先立ち、9月24日～9月27日にオリエンテーションを実施しました(授業日程の関係で学校別に実施)。高校生は、情報教育館4階多目的共用教室(2)で全学教育科目の概要と受講の留意点などの説明を受けた後、高等教育推進機構及び周辺施設を歩いて授業の行われる教室を確認し、附属

図書館北図書館でガイダンスを受けました。

高等学校は、昨年度から新学習指導要領に移行中で、授業時間数や学習内容の増加にともない放課後の高大連携活動への参加が難しくなっています。各高等学校で募集とガイダンスにご尽力いただいた先生方に感謝いたします。さらに、高校生の聴講をお認め下さった科目担当の先生方には、多大なご配慮とご協力に感謝申し上げますとともに、当該事業の充実発展に向けていっそうのご支援とご助言をお願いいたします。

平成23年度受講生調査から

平成23年度は、5校から31名が受講しました。全員が基準を満たして受講証明書の交付を受けました。受講終了後の質問紙調査によると、30名が受講した目的を「とても」または「ほぼ」達成したと回答し、「大学での勉学について展望を得る」など受講の有用性に関する9項目の評定値の平均は5段階評価の4.3で有意義な体験であったことが示されました(図1を参照)。授業の内容については、受講

表1 平成24年度 高大連携授業, 受講科目名, 担当教員, 受講者数

科目名	講義題目	担当教員	所属	受講者数
一般教育演習	北海道の魅力さをさぐる～地理学からのアプローチ～	橋本 雄一	文学研究科	1
同上	近未来社会とマテリアル工学の夢	大貫 惣明	工学研究院	1
環境と人間	2030年エレクトロニクスの旅	高橋 庸夫	情報科学研究科	1
同上	地球未来学：2070年の人類生存環境	船水 尚行	工学研究院	4
同上	海と生命	都木 靖彰	水産科学研究院	1
同上	生体機能高分子が拓く先端生命科学(Ⅱ)	出村 誠	先端生命科学研究院	1
同上	寒冷圏の科学	藤吉 康志	低温科学研究所	1
同上	海の不思議-海と人との関わり-	桜井 泰憲	水産科学研究院	1
同上	大学博物館講座-北大自然史研究の系譜	高橋 英樹	総合博物館	1
健康と社会	なぜ病気になるのか?—治療医学から予防医学へ—	武蔵 学	医学研究科	6
人間と文化	国際広報メディア学入門	江口 豊	メディア・コミュニケーション研究院	1
同上	誰でもプログラミング	布施 泉	情報基盤センター	8
歴史の視座	北海道の歴史と文化	谷本 晃久	文学研究科	1
芸術と文学	怪物論	武田 雅哉	文学研究科	1
科学・技術の世界	地球惑星科学のフロンティア	池田 隆司	理学研究院	2
同上	ノーベル賞の化学Ⅱ	石森浩一郎	理学研究院	2
同上	現代生物学への誘いⅡ	山口 淳二	理学研究院	1
同上	ゼロから始める「科学力」養成講座2(自然科学2)	鈴木 久男	理学研究院	2
計	18科目	18名		36名

生の55%が「理解できた」と回答し、北大への進学に対する気持ちの変化については、62%が「非常に」または「やや」強くなったと回答しています。1名を除き全員が高校の授業や学校行事との両立ができたこと、61%が附属図書館を利用したことがわかりました。

また、北大生との交流の機会や受講を通して得たことなどに関する自由記述から、高等学校では得られない学習経験の具体的な内容の一端をうかがうことができました。
(山岸 みどり)

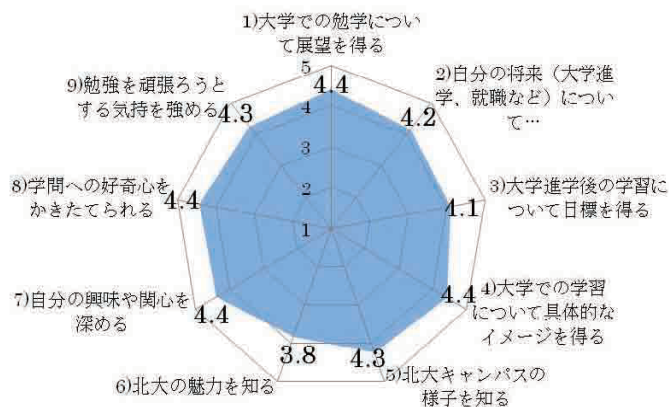


図1 平成23年度受講生調査結果

科学技術コミュニケーション CoSTEP

音声番組「かがく探検隊コーステップ」を公開

「かがく探検隊コーステップ」は、2005年のCoSTEP発足以来、受講生が企画制作しているラジオ番組です。北大の研究者を訪問し、その研究内容を専門知識を持たない方にもわかりやすく伝えるメインコーナーと、北大の情報やサイエンスにまつわる話題を伝えるサブコーナーの2部構成にしています。今年度も既に4本の番組を企画制作し、podcastで配信中です。わずか30分程の番組ですが、視覚映像に頼らず、言葉や音のみでいかに情報を伝えるか、という課題に実践を通じて取り組んでいます。

リスナーがイメージしやすいように

第191回(6月公開)の「地球内部からの“アツイ”メッセージ」では、海洋地殻の形成過程を研究している理学研究院特任助教のマリ・ピトン先生取材しました。まず地球の構造を簡単に説明してもらいました(写真1)。図を用いるなら、地殻、マントル、核の構造を一目で表すことができるでしょう。しかし言葉だけとなるとそうはいきません。分かりにくい言葉や同音異義語を言い換えたり、解説する必要があります。例えば「地殻」は近く、地核、知覚、とすべて同じ発音です。これは「地球のカラ、と書いて地殻ですね。」と言い換えます。先生の「コア」の発音が良すぎて「コー」と聞こえた時には、「コア、



写真1 インタビューする受講生(左)とマリ・ピトン先生(右)

写真2 外での録音風景

地球の真ん中の核のことですね」と言い直します。

第193回(8月公開)では、地球環境科学研究所の根岸淳二郎先生に、河床低下が自然に与える影響について伺いました。「河床低下」と漢字を見れば何を示しているか想像できますが、「かしょうていか」と音だけ聞いてすぐに「河床低下」を思い浮かべる人はなかなかいないのではないのでしょうか。この場合も、「河床低下、川の底が低く下がる、と書きますが、これはえぐれているということですか?」などと言い換えながら質問します。さらにこの現象が全国各地で起こっていると聞くと、「北海道や札幌ではどうですか?」と尋ね、この問題が身近な川、豊平川でも起こっているという話をしてくれました。このように、リスナー(聞き手)がイメージしやすいような質問や言葉の言い換えをすることで、研究への理解を深められるよう配慮します。

「音」を効果的に使って臨場感を演出

声以外の「音」も大いに利用します。第192回(7月公開)のサブコーナー「北大豆知識」では、北大正門から創成研までの約2.3kmを何分で走れるかというクイズ方式を用い札幌キャンパスの広さを紹介しました。その様子を録音しよう、と外での収録を試みました。スタジオでの声と外で話す声とでは「背景の音」が異なります。車の音、風の音が入るだけで別の場所にいるとリスナーは区別できます。そこで受講生の一人にピンマイクをつけて走ってもらい、その息遣い、途中のコメントを教員が録音しました。他のメンバーは自転車で伴走し、マイクを足元に向け、走る音を録音します(写真2)。その音を編集で合成することで、走るにつれて息が上がり、つい弱気なコメントをし、ゴールでは喜びを爆発させる、といった体験の音が出来上がり、コーナーの臨場感がまし、リスナーを惹きつける事につながります。

つかみは OK

お笑い芸人さん同様「つかみ」は重要です。その役割を果たすのが、番組冒頭のコントです。このコントも受講生が作成し出演します。冒頭の1分半で少しでも面白さを感じてもらい、番組を最後まで聞いてもらおう、という狙いがあります。

第194回(9月公開)は「トマム雲海の秘密」がサブタイトルでしたので、「雲海アイドル」という謎の新人アイドル役を登場させました。雲海が発生した日にだけ見える、しかも雲の中だからあまりクリアではない、というオチをつけました。その回の要素を、短時間で面白く表現する、というこの作業は感性とクリエイティビティが必要ですが、回ごとに受講生のスキルアップを感じられます。

制作過程も学びの一つ

常に音声表現の難しさ実感している受講生ですが、この実習の狙いはそれだけではありません。番組制作にかかるプロセスを知り、実社会に応用してほしいと考えています。

ターゲット日(公開日)をあらかじめ決めているのでスケジュール管理が必須です。公開日から逆算して、編集、取材、アポ申込、企画書作成をいつまでに行うか、といったプロセスをグループで進める事により、スケジュール感覚が身につきます。またグループ内、取材相手とのコミュニケーション構築も番組作りには欠かせません。これも科学技術コミュニケーターになるための要素といえるでしょう。

「難しい『かがく』の話をつかりやすく、楽しく伝える」をテーマに、今年度は全10本の番組制作を予定しています。次回はどこの研究室を訪問するか、どうぞお楽しみに。(滝沢 麻理)

かがく探検隊コーステップ 今年度公開番組(MP3, 又は podcasting で放送を聴けます)

- ・第191回(6月) ～地球内部からの“アツイ”メッセージ～
<http://costep.hucc.hokudai.ac.jp/costep/report/article/502/>
- ・第192回(7月) ～腸のバランスを守る抗菌ペプチド～
<http://costep.hucc.hokudai.ac.jp/costep/report/article/507/>
- ・第193回(8月) ～水環境から未来のキミへ～
<http://costep.hucc.hokudai.ac.jp/costep/report/article/513/>
- ・第194回(9月) ～トマム雲海の秘密～
<http://costep.hucc.hokudai.ac.jp/costep/report/article/521/>

市民向け講座「食の安全と放射能検査・規制」と それに向けての科学技術コミュニケーションの講義・演習

2012年9月2日に、市民向け講座「食の安全と放射能検査・規制」が本学学術交流会館にて開催されました。本稿では、この講座に対する科学技術コミュニケーション教育研究部門の関わりについて報告します。

本学では、平成23年度から文部科学省の補助金を受け、他機関（大学、研究機関、地方自治体、民間企業）とも連携して、大学生、大学院生、社会人を対象にした国際原子力人材育成イニシアティブ事業（原子力人材育成等推進事業）「多様な環境放射能問題に対応可能な国際的人材の機関連携による育成」に取り組んでいます。この3年間のプロジェクトでは、原子力関連分野のみならず、環境科学、放射化学、保健物理学、農学、獣医学などの多くの分野の視点から環境放射能の諸課題を学び、環境放射能測定技術を習得し、さらに情報発信能力を有する国際的な人材の育成を目指しています。

上記事業に対して科学技術コミュニケーション教育研究部門は、講義「科学技術コミュニケーション」を出講するという形で協力し、8月27日、筆者が、主としてプレゼンテーションスキルについて解説する講義を行いました。

講義では、「伝える相手に対する想像力を持つ」ことがプレゼンテーションの最も重要なポイントであること、そのためにいかにわかりやすい情報デザインを行うか、などを解説しました。特に、情報の「空間的構造化」と「時間的構造化」の方法について詳細に説明しました。

また、事前に受講者に「食の安全と放射能検査・規制」についてのプレゼンテーション資料を作成して提出させる課題を出しておき、提出してもらった資料に修正を加えたものを示すことで、具体的な留

意点を学んでもらいました。

さらに、聴講した受講生のうち代表者を3名選び、市民向け講座「食の安全と放射能検査・規制」で発表してもらうこととしました。講義終了後、発表者が他の受講者と協力しながらプレゼンテーション資料を修正し、リハーサルを行うための演習の時間を設け、筆者らが指導を行いました。

9月2日の市民講座は、60名程度の参加者を集めて開催されました。はじめに、受講者による3つのミニレクチャーが以下の通り行われました。

1. 食品の「新しい規制」にまつわる疑問に答える
2. 食品の検査・規制の実態はどうなっているのか？
(1. 陸産物)
3. 食品の検査・規制の実態はどうなっているのか？
(2. 海産物)

その後、参加者との間での質疑が行われ、受講者が答えられない部分に関しては専門分野の教員が補足説明を行いました。講座の後半では、JA新ふくしま代表理事専務の菅野孝志氏による特別講演「福島原発事故からの1年6か月—新生福島の実現への闘い—」が行われました。講座修了後、筆者を含む関係教員が、発表した受講者に対して講評を述べました。

「食の安全と放射能検査・規制」という難しい題材をどのように伝えるか、どのように市民の疑問に答えるか、ということは、正に科学技術コミュニケーションの典型的問題のひとつであると言えるでしょう。この市民講座への参画、ならびに「科学技術コミュニケーション」の講義・演習を通じて、受講者が科学技術コミュニケーションに対する理解を体験的に深めてくれたのではないかと感じています。

(石村 源生)

日誌 EVENTS, July-September

7月

- 1日(行事) 第1回キャンパスツアー
- 2～30日
(行事) 北海道大学公開講座(計8回)
- 4日(会議) 平成24年度第1回高等教育開発研究
専門委員会
- 8日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会2012
(名古屋)
- 9日(説明会) 北嶺高校での北大説明会
- 13日(会議) 全学教育専門委員会
- 13日(会議) 高等教育推進機構予算・施設・安全管
理委員会
- 13日 平成25年度入学者選抜要項公表
- 16日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会2012
(東京)
- 16日(行事) 北大セミナー in 旭川
- 18日(説明会) 北海道大学入試説明会(高校教諭対象)
- 21日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会2012
(大阪)
- 27日(会議) 総合教育移行専門委員会
- 29日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会2012
(横浜)

8月

- 1日(会議) 平成24年度第2回高等教育推進機構
学務委員会
- 4日(行事) 北大プレオープンキャンパス2012
- 4～7日
(行事) オープンキャンパス(札幌キャンパス)

- 6～7日
(行事) オープンキャンパス(函館キャンパス)
- 8日(会議) 平成24年度第1回高等教育推進機構
運営委員会
- 10日(会議) IRコンソーシアム設立事前会議(TV)
- 16日(会議) 総合教育学生専門委員会(持ち回り)
- 23日(会議) 全学教育科目責任者会議(全体会)
- 24日(説明会) 大学・短期大学進学相談会(札幌)
- 27日(会議) 平成24年度第4回教育改革室会議
- 31～9月1日
(会議) 第62回東北・北海道地区大学等・共
通教育研究会

9月

- 1日(説明会) 主要大学説明会(広島)
- 5日(会議) 全学教育専門委員会
- 6日(会議) 第2回クラス担任連絡会
- 10日(会議) 第66回教務委員会
- 10日(会議) 平成24年度第3回高等教育推進機構
学務委員会
- 12日(説明会) 北海道大麻高校での北大説明会
- 19～26日
(会議) 平成24年度第2回高等教育推進機構
運営委員会(持ち回り)
- 25日(会議) IRコンソーシアム設立総会(TV)
- 25～26日
(行事) 学部・学科等移行ガイダンス及び学部・
学科等紹介
- 27日(会議) 平成24年度第5回教育改革室会議
- 28日(会議) 平成24年度第4回学生委員会

行事予定 SCHEDULE, November-January

◆11月

- 18(日) AO入試・帰国子女入試(予定)

◆12月

- 5(水)～7(金)
履修登録した科目の取消し受付(Web)
- 25(火) 月曜日の授業を行う日
- 26(水) 金曜日の授業を行う日
- 27(木)～1月4日(金)
冬季休業日

◆1月

- 7(月) 授業再開
- 18(金) センター試験準備(休講)
- 19(土)～20(日)
大学入試センター試験
- 24(木) 木曜日の授業終了日
- 29(火) 火曜日の授業終了日
- 30(水) 水曜日の授業終了日
- 31(木) 初習外国語統一試験日(通常授業は休講)

ニュースレター 2012, No.92 目次

<p><巻頭言>入学者選抜研究部門長としての一年 佐々木 一彰 1</p> <p>教育総長賞受賞者の授業から 良質な授業プログラムの構築を目指して ：体育学の授業改善 大沼 義彦..... 3 数学の授業改善 澁川 陽一..... 4</p> <p>第 62 回共通教育研究会が開催..... 5</p> <p>学務委員会報告 6</p> <p>平成 24 年度 全学教育科目企画責任者名簿..... 8</p> <p>学部・学科等移行ガイダンス 学部・学科等紹介.... 9</p> <p>第 2 回クラス担任連絡会 10</p> <p>獣医研究科で英語による授業のための FD を実施.. 11</p>	<p>高等教育フォーラム「ECTS(ヨーロッパ単位互換システム)で留学を促進：ポローニャ・プロセスのキーツール」 13</p> <p>2012 年度 IDE 大学セミナー開催される..... 14</p> <p>平成 24 年度北海道地区大学 SD 研修「大学職員セミナー」を開催 16</p> <p>36 名の高校生の全学教育科目の受講始まる～北海道大学高大連携授業聴講型公開講座～ 17</p> <p>音声番組「かがく探検隊コーステップ」を公開 18</p> <p>市民向け講座「食の安全と放射能検査・規制」とそれに向けての科学技術コミュニケーションの講義・演習 20</p> <p>日誌・行事予定 21</p> <p>目次・編集後記 22</p>
---	--

編集後記

今年の夏は猛暑の影響で9月に入っても暑い日が続き秋の訪れが遅かったが、校内の木々も色づいたかと思えば、あっという間に落ち葉になってしまった。もう長い冬は目の前である。今年本州から入学した学生、新たに北海道に赴任した教職員、雪の降らない地方から来た留学生など初めての冬の北海道の生活は大変でしょう。でも、北海道でしか経験できない楽しい冬をおもいきり満喫してほしいと思う。私も 20 数年前に初めて経験した北海道の冬を思い出して楽しんでみたい。(かめ)

ニュースレター (旧「センターニュース」)

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)
通算 第 92 号

発行日： 2012 年 11 月 10 日
 発行元： 北海道大学高等教育推進機構
 (旧高等教育機能開発総合センター)
 〒 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
 電話：(011)706-7520, FAX：(011)706-7854
 編集委員：◎細川敏幸・山田邦雅・竹山幸作
 木村純・亀野淳・三上直之・瀧澤一騎
 山岸みどり・鈴木誠・池田文人
 ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
 電話：(011)706-7514, FAX：(011)706-7521
 インターネットホームページ：
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>